

万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの 参画による青少年の意識変化について (その2) —動画の視聴者の評価と参画した大学生と中学生の意識調査から—

大久保 智生・時岡 晴美・有馬 道久・松浦 隆夫*・高橋 護*
(学校教育) (人間環境教育) (学校教育) (香川県警察本部少年課) (香川県警察本部少年課)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*760-0017 高松市番町4-1-10 香川県警察本部少年課

The Changes Affected in Adolescents' Attitudes Towards Shoplifting as a Result of a Project Producing a Short Anti-shoplifting Film (2): A Survey of University and Junior High School Students

Tomoo Okubo, Harumi Tokioka, Michihisa Arima,
Takao Matsuura* and Mamoru Takahashi*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Juvenile Section, Kagawa Prefectural Police Headquarters, 4-1-10 Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

要旨 本研究では、万引き防止の啓発動画コンテンツ制作プロジェクトに参画した大学生と中学生を対象として、万引きに対する意識のプロジェクト参画前後の変化について検討した。大学生が参画した万引き防止啓発動画を視聴した88名に動画を評価してもらい、また、大学生17名と中学生31名に意識調査を実施した。その結果、大学生が参画した動画は高い評価がなされ、大学生と中学生の万引きへの意識が変化したことが明らかとなった。

キーワード 万引き 動画制作 大学生 中学生

問題と目的

近年、万引き犯罪の増加が全国的な社会問題となっている。万引き犯罪は、香川県においても社会問題になっており、人口1000人当たりの万引きの認知件数が2009年まで7年連続全国ワースト1位であることから、万引き犯罪の防止対策が喫緊の課題となっている。

こうした中、平成22年度に香川県警と香川大

学の共同事業として子ども安全・安心万引き防止対策事業が立ち上がり、県内の万引きの実態を把握し、その要因を探るために調査を行うこととなった(大久保, 2012)。子ども安全・安心万引き防止対策事業では、香川県内の万引き被疑者、一般の青少年、一般の高齢者、補導員、被害店舗に対し、アンケート調査やヒアリング調査を行ってきた(香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業, 2011)。その成果とし

て、大久保・堀江・松浦・松永・江村（印刷中）や大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡（2012）は、香川県内の万引きの被疑者を対象とした調査を行い、世代によって万引きに関する心理的要因やその関連が異なることを明らかにしている。また、大久保・杉本・時岡・常田・西原（2012）は、保護者に万引きに関する知識がないことを明らかにしている。

子ども安全・安心万引き防止対策事業調査の結果は被疑者の規範意識の高さなどを示唆しており、一般市民の万引きへの認識と異なるものであった（大久保，2012）。また、多くの県民に万引きに関する知識がないことも踏まえると、県民への啓発が重要な対策であると考えられた。こうした流れの中、香川大学と香川県警察本部生活安全企画課が連携した子ども安全・安心万引き防止対策事業と、香川県警察本部少年課と香川県教育委員会等が連携したかがわマナーアップリーダーズ活動支援事業が、万引き防止という観点から、動画コンテンツを制作することとなった。ただし、この2つの動画制作プロジェクトは排他的なものではなく、適宜、意見交換を行いながら動画制作を進めていった。そもそも、この2つの動画コンテンツは、主たる目的が異なるものである。大学生が参画した動画コンテンツは調査結果に基づいた地域全体への万引き防止の啓発や教育が目的であるが、中学生が参画した動画コンテンツは啓発番組の制作過程を通じて参画した中学生への教育が主な目的といえる。

香川大学と香川県警察本部生活安全企画課が連携した万引き防止対策事業が制作した「万引きにレッドカード」は、監督以下撮影スタッフが主体となり、香川大学の大学生たちと香川県警察本部生活安全企画課が協力する形で進められた。地域全体への万引き防止の啓発や教育を目的にしていることから、青少年編、高齢者編、主婦編、サラリーマン編の4編を調査結果に基づき、制作することとした。大久保ら（大久保・堀江・松浦・松永・江村，印刷中；大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡，2012）の研究結果から、万引きの被疑者は世代ごとに

問題背景が異なっていることが示されているため、それぞれの世代に特有のストーリーを考えることにした。また、研究結果から万引きの被疑者は悪いということを知っているが万引きをしていることから、悪いということを知らせるといふストーリーではなく、被疑者の背景や万引きをするとどのようなことになるのかがわかるようなストーリーを考えることにした。

動画のシナリオについては、毎回、制作側と大学側、県警察が議論しながら作成した。この進行については、時岡・大久保・有馬（2012）で詳しく述べている。特に、シナリオ作成で注意したことは、悲劇的な結末ではなく、万引きした人が社会の中で絆を取り戻していく姿を描くことで、単に万引きしてはいけないというメッセージだけでなく、地域ぐるみで万引き防止対策を考えていこうというメッセージを織り込むようにしたことである。そして、従来の啓発動画のような次の展開が読める説教じみた作りでは関心をもってない人間からすると興味をもって見るができないため、関心のない人間であっても興味深く見ることのできる作りにしてほしいと制作側に依頼した。その結果、サッカーの実況中継をモチーフにした作りとなっている。

香川県警察本部少年課と香川県教育委員会等が連携したかがわマナーアップリーダーズ活動支援事業が制作した「仲間で作る万引き防止DVD」は、香川県内の3つの中学校の生徒が主体となり、香川県警察本部少年課と業者が協力する形で進められた。中学生の目線からの制作と参画した中学生への啓発が目的であることから、中学生たちが脚本や構成を考えるなど、積極的に関与し、ドラマ形式やインタビュー形式など、中学生の意向を重視した作りとなっている。

大学生と中学生が参画した2つの動画プロジェクトのうち、「万引きにレッドカード：社会で取り組む万引き防止」は調査結果に基づいた万引き防止啓発を目的としていることから、啓発効果があるのかを検証するために動画

自体の評価が必要である。これまでの調査の知見を踏まえ、制作側の意図が視聴した者に実感として伝わっているかどうかを検証する必要がある。そこで、大学生が参画した万引き防止啓発動画を視聴した者にアンケート調査を行って、評価をしてもらうこととした。

目的が異なる2つの動画コンテンツであるが、動画制作プロジェクトに参画した大学生と中学生における教育効果を期待しているという点では同じである。こうした効果を検証するために、大学生と中学生の参画前後の意識の変化について検討することとした。その際、これまでの調査で測定してきた万引きに関する規範意識や家族や友人の反応などの万引きに関する心理的要因の変化に焦点を当てることにした。加えて、動画制作に参画したことによる万引きに関する心情の理解、万引き防止教育の推進、社会に見守られている感覚などの意識の変化と活動の効果に焦点を当てることとした。

以上を踏まえ、本研究の目的は、万引き防止の啓発動画コンテンツ制作プロジェクトに参画した大学生と中学生を対象として、万引きに対する意識のプロジェクト参画前後の変化について検討することである。具体的には、研究1では大学生が参画した万引き防止啓発動画を視聴した者に評価してもらい、動画全体をどのように評価したのか、視聴したことによってどのような実感が得られたのかについて検討を行う。研究2では、大学生と中学生の意識について比較を行い、大学生と中学生別に意識の変化について検討を行う。

研究1

目的

大学生が参画した万引き防止啓発動画を視聴した者に評価してもらい、動画全体をどのように評価したのか、視聴したことによってどのような実感が得られたのかについて検討を行うことが研究1の目的である。

方法

調査内容 ①動画全体の評価：動画全体の評

価については、「良かった」、「感動した」、「勉強になった」、「ひきこまれた」の4項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(5点)までの5件法である。

②動画を視聴して得た実感：動画を視聴して得た実感については、万引き防止対策に関する調査の成果から、「世代別に万引きの性質が異なること」、「警察に通報することが重要であること」、「万引き対策は地域社会全体で取り組むべきであること」、「万引きをする側にも背景があるということ」、「悪いということをわかっているにもかかわらず万引きをしてしまうこと」、「万引きをした際に家族の対応が重要であること」、「万引きをするとどういう措置が取られるのか」の7項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(5点)までの5件法である。

③動画に対する意見：動画に対する意見について、自由記述で回答を求めた。得られた回答は、大学院生2名が協議を行い、分類した。

調査対象者と手続き 2012年2月の香川県万引き防止協議会で万引き防止啓発動画を視聴した者45名と香川大学での試写会で視聴した者43名の計88名が調査に参加した。

結果と考察

動画全体の評価と動画を視聴して得た実感の検討 動画に対してどのような評価をし、動画を視聴してどのような実感を得たのかを検討するため、動画全体の評価と動画を視聴して得た実感の平均値と標準偏差を算出した。その結果をTable 1とTable 2に示す。

動画全体の評価では「良かった」で平均が4.534 (SD = .566), 「感動した」で平均が4.250 (SD = .820), 「勉強になった」で平均が4.273 (SD = .723), 「ひきこまれた」で平均が4.386 (SD = .749) であった。したがって、制作された動画は非常に高い評価が得られるものであることが明らかとなった。

動画を視聴して得た実感では、「世代別に万引きの性質が異なること」で平均が4.345 (SD = .626), 「警察に通報することが重要であるこ

Table 1 動画全体の評価

	全く あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	非常に あてはまる	平均値 (標準偏差)
良かった	0 0	0 0	3 3.4	35 39.8	50 56.8	4.534 (.566)
感動した	0 0	3 3.4	12 13.6	33 37.5	40 45.5	4.250 (.820)
勉強になった	0 0	1 1.1	11 12.5	39 44.3	37 42.0	4.273 (.723)
ひきこまれた	0 0	1 1.1	11 12.5	29 33.0	47 53.4	4.386 (.749)

下段はパーセント

Table 2 動画を視聴して得た実感

	全く あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	非常に あてはまる	平均値 (標準偏差)
世代別に万引きの性質が異なることを実感した	0 0	0 0	7 8.0	43 49.4	37 42.5	4.345 (.626)
警察に通報することの重要性を実感した	0 0	1 1.1	7 8.0	36 40.9	44 50.0	4.398 (.687)
万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	0 0	1 1.1	3 3.4	38 43.2	46 52.3	4.466 (.624)
万引きする側にも背景があることを実感した	0 0	1 1.1	7 8.0	34 38.6	46 52.3	4.420 (.690)
悪いということをわかっているでも万引きをしてしまうことを実感した	0 0	3 3.4	6 6.8	45 51.1	34 38.6	4.250 (.731)
万引きした際に家族の対応が重要であることを実感した	0 0	2 2.3	4 4.5	27 30.7	55 62.5	4.534 (.694)
万引きをするとどういった措置が取られるのかを実感した	1 1.1	3 3.4	14 15.9	34 38.6	36 40.9	4.148 (.891)

下段はパーセント

と」で平均が4.398 (SD = .687), 「万引き対策は地域社会全体で取り組むべきであること」で平均が4.466 (SD = .624), 「万引きをする側にも背景があるということ」で平均が4.420 (SD = .690), 「悪いということをわかっているでも万引きをしてしまうこと」で平均が4.250 (SD = .731), 「万引きをした際に家族の対応が重要であること」で平均が4.534 (SD = .694), 「万引きをするとどういった措置が取られるのか」で平均が4.148 (SD = .891)であった。したがって、制作された動画は監修側の意図が実感されるものであることが明らかとなった。

以上の結果から、非常に高い評価と実感が得

られる動画コンテンツを制作することができたといえる。動画全体の評価が高いことから、引きこまれ、感動でき、勉強になる良い動画といえ、加えて監修側の意図も実感できるものになったといえる。

動画全体の評価に及ぼす影響の検討 どのような実感が動画全体の評価に影響しているのかを検討するため、動画全体の評価を従属変数、動画を視聴して得た実感を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果をTable 3に示す。

「良かった」では、「世代別に万引きの性質が異なること」の実感 ($\beta = .419, p < .001$), 「万引きをした際に家族の対応が重要であること」

Table 3 動画全体の評価に及ぼす影響

	良かった	感動した	勉強になった	ひきこまれた	
世代別に万引きの性質が異なることを実感した	.419***	.095	.271**	.248*	
警察に通報することの重要性を実感した	.123	.061	.197 [†]	.100	
万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した	.141	.117	.170 [†]	-.073	
万引きする側にも背景があることを実感した	.108	.074	.095	.289*	
悪いということをわかっていても万引きをしてしまうことを実感した	-.019	.073	-.007	.122	
万引きした際に家族の対応が重要であることを実感した	.231*	.296.*	.222 [†]	.011	
万引きをするとどういふ措置が取られるのかを実感した	-.060	.016	.021	.196 [†]	
重相関係数	.695***	.530***	.677***	.660***	
値は標準偏回帰係数		[†] p<.1	*p<.05	**p<.01	***p<.001

の実感 ($\beta = .231, p < .05$) から正の影響が認められた。「感動した」では、「万引きをした際に家族の対応が重要であること」の実感 ($\beta = .296, p < .05$) から正の影響が認められた。「勉強になった」では、「世代別に万引きの性質が異なること」の実感 ($\beta = .271, p < .01$)、「警察に通報することが重要であること」の実感 ($\beta = .197, p < .1$)、「万引き対策は地域社会全体で取り組むべきであること」の実感 ($\beta = .170, p < .1$)と「万引きをした際に家族の対応が重要であること」の実感 ($\beta = .222, p < .1$) から正の影響が認められた。「ひきこまれた」では、「世代別に万引きの性質が異なること」の実感 ($\beta = .248, p < .05$) と「万引きをする側にも背景があるということ」の実感 ($\beta = .289, p < .05$)、「万引きをするとどういふ措置が取られるのか」の実感 ($\beta = .196, p < .1$) から正の影響が認められた。

以上の結果から、ほとんどの実感が評価と結びついたことで、単純に評価の高い動画ではなく、意図を実感した上での評価の高さであることが明らかとなった。このことから、啓発動画としては非常に効果的なものになったといえる。

動画に対する意見の検討 動画に対する意見について検討するため、カテゴリーを設定し、自由記述を分類し、その割合を算出した。その結果をTable 4に示す。

動画に対する意見の自由記述は、万引きへの理解の促進 (31%)、動画のクオリティへの肯定的評価 (21%)、動画による万引き防止啓発

への期待 (15%)、動画の独自性への肯定的評価 (10%)、動画への懐疑的評価 (10%)、その他 (13%) に分類された。したがって、約8割が動画への肯定的な記述であった。動画視聴による万引きへの理解の促進が最も多く、次に動画のクオリティへの肯定的評価が多かった。また、動画による万引き防止啓発への期待もあり、動画の独自性への肯定的評価もあった。以上のように、監修の側が意図したような動画が制作できたといえる。その一方で、動画への懐疑的な評価も1割程度であったが存在した。しかし、代表的な記述例を見てみると「万引きを減らすための効果は、このDVDから感じられない」という記述もあったが、「万引きに至るいきさつをみせようとする結果だと思いますが、万引きが悪いことだということがみる限りイメージできませんでした」などは、自由記述の結果も鑑みると従来の動画をイメージしていたことによるためであると考えられる。これはある意味、被疑者は万引きが悪いことを知っているため、悪いということを教えるのではなく、様々な背景があることや万引きをした場合にどのようなことが起こるのかを伝えるという今回の動画制作の意図がうまく伝達した結果ともいえる。また、「啓発という点においては良かったと思うが、実際このムービーを見て何かが変わるとは思えない」という意見については、啓発だけでなく、動画を基にした教育プログラムの開発も視野に入れているため、説明不足であったと考えられる。

Table 4 動画に対する意見のカテゴリー分類の結果と記述例および割合

カテゴリー	記述例	割合
万引きへの理解の促進	<p>解説が入るのでわかりやすかった。ちょっとのことでもなぜ通報するんだろうと思ってましたが、意味がわかりました。</p> <p>万引きをする動機は人それぞれで、またその性質もかなり異なることを実感した。完成度の高いムービーで勉強になりました。</p> <p>どんな世代でもやり直すきっかけまであって、防止策も考えられるようになって良かった。</p>	31%
動画のクオリティへの肯定的評価	<p>ドラマがおもしろすぎて、万引き防止のテーマを忘れてしまうほどひきこまれた。</p> <p>予想以上にクオリティが高かった。すごいリアルな感じがした。非常に満足。</p> <p>思った以上にクオリティが高く驚きました。また、内容も考えさせられるものが多くあったと思います。</p>	21%
動画による万引き防止啓発への期待	<p>実況という形が面白いし、分かり易くて良かった。このムービーは心情が理解し易いので、色んな所で流してほしい。</p> <p>鑑賞した後に後味の良い作品だったので、嫌悪感を感じにくどの年齢の方が見ても受け入れやすい作品だと思いました。どんな事でも賛否両論がでてくると思いますが、どういう視点をもつにしても見た人の心に何か衝撃を与えることは大切だと思います。折角のDVDなので、多くの方の目に触れることを願います。</p> <p>万引き防止啓発DVDの配布先に、学校へ青少年に見てもらい啓発されると思います。</p>	15%
動画の独自性への肯定的評価	<p>いわゆる啓発ビデオとは異なり、見させられている感はなかった。子ども編の親の対応の仕方を示しているところは、土下座はちょっとオーバーかと思ったが、重要な部分であったと思う。とても心に残る映像でした。</p> <p>ただ単に「万引きはいけない」ということだけでなく、万引きをする側の視点から「ダメだと分かっているがらどうして事に至ったのか」ということや、また事後、どうなっていったかというところまで描かれていたため、とても現実的に捉えることができたと思います。</p> <p>今まで見てきたビデオと違い興味をもってみる事ができた。「見てもらう」ということが第一なので、ありきたりのパターンではないのが効果的だった。両立が難しいが、罪の重さみたいなのが残ると指導用のビデオとしては使いやすい(教員としては……)。</p>	10%
動画への懐疑的評価	<p>万引きを減らすための効果は、このDVDから感じられない。</p> <p>万引きに至るいきさつをみせようとする結果だと思いますが、万引きが悪いことだということがみる限りイメージできませんでした。</p> <p>啓発という点においては良かったと思うが、実際このムービーを見て何かが変わるとは思えない。</p>	10%
その他	<p>DVD作成時の苦勞がしのばれます。</p> <p>犯罪を犯した後の社会的な責任をくわしく説明してほしい。万引きの手口の紹介と対策をお願いします。</p> <p>すべてハッピーエンドで終わるので、見た後落ち込むことがなくよかったのですが、万引きをすることで幸せになれるようにもとれる内容だったので、1つくらいは万引きによって崩壊していく人生みたいなものがあってもよかったのかなと思いました。</p>	13%

研究2

目的

万引き防止啓発動画制作に参画した大学生と中学生の意識について比較を行い、大学生と中学生別に意識の変化について検討を行うことが研究2の目的である。

方法

調査内容 ①万引きに関する規範意識：万引きに関する規範意識については、「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会（2009）の調査を参考に、大久保・堀江・松浦・松永・江村（印刷中）が作成した尺度で測定した。尺度は、「万引きは悪いことである」、「万引きくらいなら問題ない（逆転項目）」、「万引きしても処罰はたいしたことがない（逆転項目）」、「つかまっても弁償すれば許される（逆転項目）」の4項目で構成されており、4項目の合計を項目数で割り、「万引きに関する規範意識」得点とした。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

②万引きした際の家族の反応：もし万引きしたら、家族はどう思うかについては、大久保・堀江・松浦・松永・江村（印刷中）が作成した家族の否定的反応の推測尺度を使用した。尺度は、「驚く」、「悲しむ」、「怒る」、「困る」の4項目で構成されており、4項目の合計を項目数で割り、「家族の否定的反応の推測」得点とした。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

③万引きした際の友人の反応：もし万引きしたら、友人はどう思うかについては、大久保・堀江・松浦・松永・江村（印刷中）が作成した友人の否定的反応の推測尺度を使用した。尺度は、「驚く」、「悲しむ」、「怒る」、「怖がる」、「困る」の5項目で構成されており、5項目の合計を項目数で割り、「友人の否定的反応の推測」得点とした。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）

までの5件法である。

④万引きに関わる人の心情への理解：万引きに関わる人の心情の理解については、万引きされる側、万引きを捕まえる側、万引きをする側の心情の理解に焦点を当て、「万引きされる店の人の気持ちや思いが理解できる」、「万引きを捕まえる側の人の気持ちや思いが理解できる」、「万引きをする人の気持ちや思いが理解できる」の3項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

⑤万引き防止対策の推進：万引き防止対策の推進については、万引き防止への関心、社会での万引き防止対策の必要性、学校での教育の必要性に焦点を当て、「万引き防止への関心がある」、「もっと社会で万引き防止の対策をする必要がある」、「学校などでも万引きについて取り上げる必要がある」の3項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

⑥社会に見守られている感覚：社会に見守られている感覚については、地域、家族、警察に焦点を当て、「非行に走らないように、地域の人に見守られているという感覚がある」、「非行に走らないように、家族に見守られているという感覚がある」、「非行に走らないように、警察に見守られているという感覚がある」の3項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

⑦活動の効果：活動の効果については、「満足している」、「積極的に活動した」、「この活動を終えて達成感がある」、「非行防止をよびかける企画があれば参加したい」、「このような活動をもっと仲間に広げたい」の5項目で測定した。回答形式は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（5点）までの5件法である。

調査対象者と手続き 万引き防止啓発動画制作に参画した香川大学の学生17名と香川県内の3つの中学校の生徒31名が動画制作前と動画制作後にアンケート調査に参加した。その際、学

籍番号や出席番号で対象者の同定を行った。⑦活動の効果は、動画制作後のみ尋ねている。

結果と考察

大学生と中学生の意識の比較 大学生と中学生の意識の比較を行うため、学校段階(大学生, 中学生)を独立変数としたt検定を行った。その結果をTable 5に示す。

動画制作前では以下のような結果が得られた。万引きに関する規範意識 ($t=2.934, df=45, p<.01$) では、中学生が大学生よりも有意に得点が高かった。万引き防止対策の推進では、万引き防止への関心 ($t=3.624, df=45, p<.01$)、社会での万引き防止対策の必要性 ($t=2.514, df=45, p<.05$)、学校での教育の必要性 ($t=2.291, df=45, p<.05$) において、中学生が大学生よりも有意に得点が高かった。社会に見守られている感覚では、地域に見守られている感覚 ($t=6.424, df=44, p<.001$)、警察に見守られている感覚 ($t=4.512, df=44, p<.001$) において、中学生が大学生よりも有意に得点が高かった。

動画制作後では以下のような結果が得られた。家族の否定的反応の推測 ($t=2.350, df=42, p<.05$) では、大学生が中学生よりも有意に得点が高かった。万引きに関わる人の心情への理解では、万引きをする側の心情の理解 ($t=2.066, df=42, p<.05$) において、大学生が中学生よりも有意に得点が高かった。

これらの結果から、動画制作前では、中学生が大学生よりも規範意識が高いことが明らかとなった。この結果は、大久保・宮前・宮前(印刷中)の研究と一致していた。しかし、動画制作後では、両者に差が認められなくなった。動画制作前では、万引き防止対策の推進の万引き防止への関心、社会での万引き防止対策の必要性、学校での教育の必要性において、中学生が大学生よりも万引き防止対策を推進すべきと考えていることが明らかとなった。また、動画制作前では、社会に見守られている感覚の地域に見守られている感覚、警察に見守られている感覚において、中学生が大学生より見守られていると感じていることが明らかとなった。

動画制作後では、大学生が中学生よりも万引きした際に家族が否定的反応をすると推測していることが明らかとなった。また、動画制作後では、大学生が中学生よりも万引きをする側の心情に対して理解していることが明らかとなった。なお、動画制作後の活動の効果における満足感、積極的関与、達成感、別企画への参加意欲、活動の仲間への普及では、大学生と中学生で違いは認められなかったが、平均が4を超えており、大学生も中学生も活動の効果を実感していることが明らかとなった。このことから、大学生も中学生も動画制作活動に対して肯定的な評価をしていると考えられる。

大学生の意識の変化の検討 活動前と活動後の大学生の意識の変化を検討するため、時期(活動前、活動後)を独立変数としたt検定を行った。その結果をTable 6に示す。

規範意識 ($t=2.631, df=11, p<.05$) では、動画制作後が動画制作前よりも有意に得点が高かった。万引き防止対策の推進では、万引き防止への関心 ($t=2.561, df=11, p<.05$)、社会での万引き防止対策の必要性 ($t=2.419, df=11, p<.05$)、学校での教育の必要性 ($t=3.458, df=11, p<.01$) において、動画制作後が動画制作前よりも有意に得点が高かった。社会に見守られている感覚の地域に見守られている感覚 ($t=2.253, df=11, p<.05$) において、動画制作後が動画制作前よりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、大学生では、活動への参画によって、規範意識が高まり、万引き防止への関心が高まり、社会での万引き防止対策の必要性と学校での教育の必要性が高まり、社会に見守られている感覚も高まった。大久保ら(印刷中)の研究では、大学生の万引きに関する規範意識の低さが明らかとなっているが、活動への参画によって規範意識が高まる可能性が示唆された。また、活動に参画することにより、これまで注意を向けていなかった万引き防止への関心が高まり、社会での万引き防止対策や学校での教育の必要性について考えるようになったのではないかと推測される。大学生の活動は、撮影スタッフの手伝いが主であったが、撮影ス

Table 5 大学生と中学生の万引きに関する意識の平均値と t 検定結果

	大学生 N=17	中学生 N=31	t 値
動画制作前			
万引きに関する規範意識	3.868 (.928)	4.483 (.517)	2.934**
家族の否定的反応の推測	4.471 (.458)	4.379 (.520)	.599
友人の否定的反応の推測	3.306 (.732)	3.447 (.777)	.609
万引きに関わる人の心情への理解			
万引きされる側の心情の理解	3.529 (.943)	3.233 (1.073)	.948
万引きを捕まえる側の心情の理解	3.176 (1.131)	3.267 (1.015)	.281
万引きをする側の心情の理解	2.706 (1.105)	2.667 (1.446)	.097
万引き防止対策の推進			
万引き防止への関心	3.353 (.931)	4.200 (.664)	3.624**
社会での万引き防止対策の必要性	3.588 (.939)	4.200 (.714)	2.514*
学校での教育の必要性	3.765 (.664)	4.233 (.679)	2.291*
社会に見守られている感覚			
地域に見守られている感覚	1.882 (.857)	3.414 (.733)	6.424***
家族に見守られている感覚	3.529 (.874)	3.828 (.889)	1.104
警察に見守られている感覚	2.529 (1.007)	3.793 (.861)	4.512***
動画制作後			
万引きに関する規範意識	4.577 (.359)	4.597 (.546)	.120
家族の否定的反応の推測	4.692 (.309)	4.234 (.671)	2.350*
友人の否定的反応の推測	3.631 (.725)	3.542 (.758)	.359
万引きに関わる人の心情への理解			
万引きされる側の心情の理解	4.000 (.816)	4.226 (.669)	.957
万引きを捕まえる側の心情の理解	3.769 (1.013)	4.032 (.706)	.988
万引きをする側の心情の理解	3.538 (1.198)	2.742 (1.154)	2.066*
万引き防止対策の推進			
万引き防止への関心	4.154 (.689)	4.516 (.677)	1.612
社会での万引き防止対策の必要性	4.308 (.751)	4.581 (.564)	1.325
学校での教育の必要性	4.538 (.519)	4.258 (.729)	1.256
社会に見守られている感覚			
地域に見守られている感覚	2.769 (1.423)	3.387 (.882)	1.755
家族に見守られている感覚	3.923 (.954)	3.871 (.806)	.185
警察に見守られている感覚	3.308 (1.316)	3.645 (.839)	1.023
活動の効果			
満足感	4.615 (.506)	4.548 (.568)	.368
積極的関与	4.000 (1.000)	4.065 (1.063)	.187
達成感	4.231 (.599)	4.323 (.871)	.346
別企画への参加意欲	4.154 (.555)	4.290 (.902)	.505
活動の仲間への普及	4.077 (.641)	4.161 (.860)	.318

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 6 大学生の動画制作への参加による万引きに関する意識の変化の平均値と t 検定結果

	動画制作前	動画制作後	t 値
万引きに関する規範意識	3.896 (.914)	4.583 (.374)	2.631*
家族の否定的反応の推測	4.417 (.492)	4.667 (.308)	1.915
友人の否定的反応の推測	3.067 (.725)	3.600 (.748)	1.975
万引きに関わる人の心情への理解			
万引きされる側の心情の理解	3.417 (1.084)	3.917 (.793)	1.198
万引きを捕まえる側の心情の理解	3.167 (1.337)	3.833 (1.030)	1.609
万引きをする側の心情の理解	2.667 (1.231)	3.667 (1.155)	1.732
万引き防止対策の推進			
万引き防止への関心	3.250 (1.055)	4.167 (.718)	2.561*
社会での万引き防止対策の必要性	3.500 (1.087)	4.333 (.778)	2.419*
学校での教育の必要性	3.750 (.754)	4.583 (.515)	3.458**
社会に見守られている感覚			
地域に見守られている感覚	1.833 (.937)	2.833 (1.467)	2.253*
家族に見守られている感覚	3.500 (1.000)	3.833 (.937)	1.076
警察に見守られている感覚	2.333 (1.073)	3.250 (1.357)	1.894

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01

タッフという社会人たちと活動することで社会に見守られている感覚が高まったと考えられる。このように、大学生については、動画制作プロジェクトの参画は社会の一員であるという感覚を高めるものであったといえる。

中学生の意識の変化の検討 活動前と活動後の中学生の意識の変化を検討するため、時期(活動前、活動後)を独立変数とした t 検定を行った。その結果を Table 7 に示す。

友人の否定的反応の推測 ($t=2.676$, $df=23$, $p<.05$) では、動画制作後が動画制作前よりも有意に得点が高かった。万引きに関わる人の心情への理解では、万引きをされる側の心情の理解 ($t=4.290$, $df=23$, $p<.001$)、万引きを捕まえる側の心情の理解 ($t=3.315$, $df=23$, $p<.01$) において、動画制作後が動画制作前よりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、中学生では、活動によって、万引きされる側の心情の理解や万引きを捕まえる側の心情の理解が高まり、万引きした場合の友人の否定的反応の推測も高まった。店舗を舞台としたドラマ形式や警察へのインタビュー形式の動画制作活動などもあり、万引き

される側や万引きを捕まえる側への心情への理解が高まったと考えられる。また、中学生の万引きへの意識に大きな影響を及ぼしている友人の反応の推測も変化したことからも、動画制作に参画した中学生に大きな変化をもたらすものであったと考えられる。

総合考察

本研究では、万引き防止の啓発動画コンテンツ制作プロジェクトに参画した大学生と中学生を対象として、万引きに対する意識のプロジェクト参画前後の変化について検討した。具体的には、研究 1 では大学生が参画した万引き防止啓発動画を視聴した者に評価してもらい、動画全体をどのように評価したのか、視聴したことによってどのような実感が得られたのかについて検討を行った。その結果、動画は高い評価がされ、制作側の意図が十分に伝わる動画であることが明らかとなった。研究 2 では、大学生と中学生の意識について比較を行い、大学生と中学生別に意識の変化について検討を行った。その結果、大学生も中学生もプロジェクト参画に

Table 7 中学生の動画制作への参加による万引きに関する意識の変化の平均値と t 検定結果

	動画制作前	動画制作後	t 値
万引きに関する規範意識	4.458 (.487)	4.583 (.493)	.896
家族の否定的反応の推測	4.413 (.480)	4.326 (.502)	.868
友人の否定的反応の推測	3.483 (.727)	3.775 (.588)	2.676*
万引きに関わる人の心情への理解			
万引きされる側の心情の理解	3.250 (1.113)	4.250 (.737)	4.290***
万引きを捕まえる側の心情の理解	3.333 (.963)	3.958 (.751)	3.315**
万引きをする側の心情の理解	2.792 (1.444)	2.958 (1.160)	.569
万引き防止対策の推進			
万引き防止への関心	4.250 (.532)	4.458 (.721)	1.310
社会での万引き防止対策の必要性	4.292 (.751)	4.542 (.588)	1.661
学校での教育の必要性	4.250 (.676)	4.167 (.761)	.492
社会に見守られている感覚			
地域に見守られている感覚	3.522 (.730)	3.522 (.790)	.000
家族に見守られている感覚	3.913 (.949)	3.957 (.825)	.204
警察に見守られている感覚	3.783 (.902)	3.652 (.832)	.549

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

よって、万引き防止への意識が高まったことが明らかとなった。以上の結果から、プロジェクトの有効性が検証されたといえる。

地域全体への万引き防止の啓発や教育を主たる目的とした大学生が参画した「万引きにレッドカード：社会で取り組む万引き防止」は動画としての高い評価と制作側の意図が十分に伝わる動画であることが示された。今後は、単に動画を見せて啓発するだけではなく、動画を活用して、地域全体での万引き防止教育にも役立たせていくつもりである。その際、関心のない人間にとっても見やすいクオリティの高い動画であることは非常に重要であるといえる。

自由記述には効果に対する懐疑的な意見も1割存在したが、その内容を勘案すると従来の動画コンテンツと異なることが起因していると考えられた。懐疑的な意見の内容を鑑みると、懐疑的な意見が出ること自体、制作した啓発動画コンテンツが従来の啓発動画コンテンツとは異なるものになった証といえる。多くの地域住民に見てもらおうことを考えると、従来の啓発動画のように次の展開が読める説教じみた作りでは関心をもってない人間に興味をもって見てもら

うことができない。したがって、制作した動画がまずは多くの人に見てもらえる作りになっていることは、地域全体での万引き防止教育などの今後の活動を視野に入れた際、非常に意義があるといえる。

さらに、こうした万引き防止の啓発動画コンテンツ制作プロジェクトに関わることは、大学生にとっても、中学生にとっても意識の変化が見られ、教育的な効果があることが明らかとなった。特に、大学生も中学生も活動を高く評価していることから、こうした警察とのプロジェクトへの参画は意義のあるものといえるだろう。ただし、これは何かしらの活動に参画をすればいいという単純なことではない。今回、プロジェクトに参画した大学生は主に教育学部の学生であり、また、中学生は万引き防止に関心のある生徒たちであった。したがって、万引き防止に全く関心のない大学生や中学生については、本プロジェクトは効果を持たない可能性もある。しかし、いずれにせよ、万引きに関する知識がないことなどは共通しており、万引きについて考える契機にはなったと考えられる。

今後の課題としては、2つ挙げられる。1つ

目は評価の高い万引き防止啓発動画をどのように普及させていくかという問題である。制作された動画は興味深く見ることのできる内容であることから、単純に配布するだけではなく、教材として活用していくことも可能である。つまり、単に、動画を見させて万引き防止を啓発するというのではなく、万引きとはどのような犯罪なのかを知識として獲得し、どのように万引きを予防し、対応していく必要があるのかを考える契機として動画を用いることが必要になるだろう。動画自体は10分程度と時間的に長いものではないので、現時点では、警察関係や学校関係の集まりなどでの上映を予定し、ワークショップを行い、万引き防止教育を推進していく予定である。

2つ目は、実際に参画による効果があったのかという問題である。今回調査に参加した大学生と中学生は意識の高い学生であったことから、積極的にプロジェクトに参画していたが、他の学生や生徒においても同じような教育的効果が得られるかどうかは疑問である。したがって、今回の活動の教育効果を過度に一般化すべきではないだろう。ただし、今回参加した大学生と中学生が普段考えることのない万引きに関する意識や知識が向上したことも事実である。したがって、今後は普段考えることのない万引きについてどのように教育していくのかについて検討する必要があるだろう。

謝辞

本プロジェクトに多大なご尽力をいただいた香西志帆監督と撮影スタッフの皆さんに深く感謝いたします。また、本プロジェクトに参画し、調査に協力していただいた大学生と中学生の皆さんにお礼申し上げます。

付記

本論文に記載された執筆者の所属は、研究当時である。

引用文献

香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業 2011

万引き防止対策に関する調査報告書 香川大学・香川県警察

「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会 2009 万引きに関する調査研究報告書 警視庁

大久保智生 2012 青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 印刷中 万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から科学警察研究所報告

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永富太一・時岡晴美 2012 万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.

大久保智生・宮前淳子・宮前義和 印刷中 青少年の万引きに関する心理的要因の学校段階別の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きへの意識に及ぼす影響 生徒指導学研究

大久保智生・杉本ゆか・時岡晴美・常田美穂・西原和代 2012 保護者は子どもの万引きをどのようにとらえているのか：保護者の万引きに関する心理的要因の検討 香川大学教育実践総合研究, 25, 69-79.

時岡晴美・大久保智生・有馬道久 2012 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について（その1）：青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.